

18日から天理参考館企画展

「二度見する造形—古代の焼物から—」

自由に造形でき、焼くと固くなるという粘土の特性が、焼物を生み出した。瞬間に、焼物は用途を広げ、しだいに人が作る主要な製品になった。こうした焼物には、優れた機能的なものもあれば、神秘的な世界観を表現して複雑怪奇な形になったものもある。天理大学付属天理参考館(天理市守目堂町)所蔵の古代の焼物から、つい「二度見」したくなるような造形を選び、展示する第91回企画展「二度見する造形—古代の焼物から—」が、18日から同館で始まる。3月6日まで。

展示は「特異な象形」「特殊な構造」「特異なおもしろさ」の3部構成。古代において、一つ一つに注入されるエネルギーは相当なもの。特に動物などをかたどる場合、その背景にある理念・情念を注ぎ込んでいる。時代や地域を超えて現代の人々にも直に訴えてくる。

の地域で行われていた特殊な宗教儀礼に用いられた専用の焼物となれば、ほとんど理解できない。そして、特に東アジアのものは日本人にとって馴染み深いもので、その意味もある程度は理解され、すんなりと受け入れられる。とくに縄文土器の場合、背景にある重厚な世界観を表しており、じっくり見ていると、それぞれに味わいが出てくる。

また、貯蔵・煮炊き・盛り付けなどに使う日常容器とかげ離れた形態・構造を持つものの中で、ある年代

出品数は計50点。主な展

機能的な優れものから、神秘的で複雑怪奇なものまで50点展示



▲鹿形注口土器(イラン、ギーラーン、前1000年頃、高さ34・5センチ)
見事な角を持った鹿をかたどった赤褐色の磨研土器で、くちばし状にとがった口部から液体を出し入れする。垂直にもたげた頸部が太く、腰部も大きく誇張されており、力量感にあふれている。胴部が対照的に細くくぼんでいて、それがかえって躍動感をよく表している。



▲牛形注口土器(イラン、ギーラーン、前1000年頃、高さ24・8センチ)
西アジアで実際に生息するこぶ牛をかたどった注口土器で、赤褐色の胎土を用い、磨きを加えて丁寧に仕上げられている。くちばし状に突き出した注口部から液体を出し入れする。三日月状に突き出した角は雄大で、こぶも大きい。これに対し、脚部は短く簡略化されており、かえってこぶ牛の持つ力量感がうまく伝わってくる。喉の部分に浮き出た一筋の稜線は脈打っているようで、生命感があふれる。

だき、その背景にある世界観や情念に思いを馳せてもらえる展覧です。現代は高度な情報社会で、知りたい情報はすぐに手に入る時代。ただ実態は、次から次へと「流し見」しているだけではないでしょうか。ちょっと立ち止まって古代の造形を「一度見」してみませんか」と話している。

同館2階ホールでの関連イベント(入館券必要)の申し込みは第91回企画展サイト(https://www.sankokan.jp/news_and_information/ex-sp/sp091.html)へ。イベント内容は次の通り。

【記念講演会】演題「古代の土器から見たオリエントと中南米の世界観」講師「須藤寛史氏(岡山市立オリエント美術館学芸員)」日時「2月4日午後1時半〜同3時」定員「30人(事前申込制)」
【トーク・サンコーカン②】演題「古代アンデスの土器づくり」講師「荒田恵(天理参考館学芸員)」日時「2月23日午後1時半〜同2時半」定員「30人(事前申込制)」
開館時間は午前9時半〜午後4時半(入館は同4時)。火曜日休館。入館料は大人500円、小中高生300円。問い合わせは、同館☎0743(63)8414へ。



▲白胎加彩鎮墓獸像(中国唐、8世紀、高さ34・2センチ、高さ35・4センチ)
背に翼を持ち、頭部の角が螺旋状に絡みついて一角を表現した鎮墓獸である。蹲踞(そんきょ)の姿勢をとるなど、ほぼ同じ造形をしている。翼は羽毛が進化したもので、個々に伸びて火焰(えん)状になっている。色付けは、釉を使わず、鉱物質の絵の具(顔料)で彩色した「加彩」と呼ばれる手法。顔は人間と獸の顔を表しているが、この二種類の顔を表現するのが鎮墓獸の特徴。どちらも口を閉じて唇(ひげ)を生やし、大きな目と耳を持つ。恐ろしい顔をした体を墓前に置くことで、悪霊を退け、被葬者を守護することができた。



▲笛吹ボトル(ペルー北高地、レクワイ文化、前2000〜後600年頃、高さ15センチ)
緻密な白色粘土を利用し、ネガティブ技法で文様を描いた土器で知られる。前後の胴部に同じモチーフを描いている。中央のシグザグ文をはさんで月の聖獣が対峙するように配置する。この聖獣は神話世界の動物であり、ペルー北海岸の世界観で月が重要視されていたことを物語っている。近年の研究により、ヤマネコがモデルになったことが指摘されている。